

ほおじろ

今年の七月から八月へかけての十日あまりを、広島県北部を流れる西城川のほとりの山宿ですごした。

ある朝、宿の人たちはまだ起き出さない時刻に、わたくしは散歩に出た。足はいつものように、流れに沿う道を上手へ向いていた。五百メートルほどさかのぼると、川沿いの道の左側には稲田も見えはじめ、少し離れた高みに農家の屋根も目に入るようになる。このあたりにくると、川幅もずっと狭くなり、川中の岩は激流にさらされて角がとれ、丸い形をしたものが多かった。

稲田のほとりに、どっしりした恰好で据っている、高さ三メートルくらいの岩がある。正面から見ると、握り飯のような形をしている。いかにも風雪にたえてきたという感を与える。それに向かつて立っていると、心おのずから安らぎゆくをおぼえる。と、ほおじろの声が急に聞こえた。岩の向こうは雑木林になっており、声はその中の梢からと思われた。朝空に澄み通るよう

な、美しい声である。聞き耳を立てていると、それに合わせるように、対岸の梢からも、同じような声が、川の音を越えて聞こえてきた。

ほおじろの鳴き声は、子どもの頃から、「一筆啓上仕る」というように聞きなれてきた。しかし今聞いている二羽とも、もう少し丁寧なように鳴いているようである。「一筆啓上仕り候」というふうに聞こえる。文末の「そうろう」には、実はこんな単純な表記ではあらわせない、もっと複雑微妙な音の構造があると思われる。ともかく、今まで聞きなれた声に比べると、この方がほおじろの鳴き声としては、標準型とすべきであらうか。

帰りかけると、道と川との間の繁みの梢に、あらわに姿を見せながら鳴くのがいる。これは、「一筆仕る」というように、途中を略している。鳴く様子を見ると、時々忙しそうに、右の、あるいは左の羽に口ばしを入れて、掻くようなしぐさをする。そして、急いで姿勢を正して歌おうとするが、うまく歌えないで、何度もやり直している。「イッ」といいかけたり、「イッピッ」といいかけたりして、やっと本調子にもどる。十分呼吸がととのわないうために、発声がうまくいかないものと見える。

じ　もう少しくると、しわがれたような声で鳴くのがいる。初めの方が崩れたように、「ぐずぐずお　ぐずぐず仕り候」というように聞こえる。わたくしは思わず吹き出した。

ほ　ほおじろにもそれぞれ個性のあることが、その鳴き声から知られる。川瀬を隔てて鳴き交して

いた二羽も、精密に聞くと、異なった音色をしているかも知れない。

自然のハーモニー！　そういうことを考えはじめると、現代の世情というものに、自然に思考が及んでいった。そのとき、「文明管理」ということばが、ふと浮かんできた。「核管理」という言い方は聞かれるが、「文明管理」というのはまだ聞かないようである。このように、美しい自然のハーモニーの聞かれる場所は、まだまだ日本中に沢山ある。そういう場所へ、レジャーと称して、都会人がどやどやと押しかける。トランジスタラジオを持ち込む。ポータブル蓄音機を持ち込む。蓄音機には、ご念が入って拡声器までそえて。爆音をとどろかせてモーターバイクも入る。まさに「機械文明」の侵入である。

こうした場所に入るには、おのずから作法というものがあるはずだ。ある地点でバイクを捨て、もちろん最初から、ラジオも、蓄音機も持たないで、近づいてゆくべきだ。そして、あるがままの自然の中に、あらゆる日常性から自己を解放するがよい。そこから、明日の活動のエネルギーとなるヴァイタリティーが体内に蘇ってくるはずである。この程度の「文明管理」ができる理性と節度がないようでは、ついに機械文明の急速の進行につれて、人類はみずからの生存すら危殆に瀕せしめなければならないだろう。いや、そういう情況はすでに着々と進んでいる。